

サービ斯拉ーニングを振り返って

社会福祉学部社会福祉学科 2年 柴田 和美

活動先：NPO法人 あかり

クラス：松下 典子 先生

私は、中学二年生の時に職場体験で特別養護老人ホームへ行ったことを思い出しながら、サービ斯拉ーニングの活動に入った。しかし、今回お世話になったのはNPO法人である。施設の大きさも違えば、設備、制度、人数も違い、気持ちを新しく入れ替えねば、と思った。

あかりは小規模で多機能な活動している。活動していて気づいたことは、少人数だからといって、利用者の方一人ひとりと関わるということはない。社会でも問題になっている現場の人員不足を目の当たりにした。大きい施設よりは利用者の方は少ないので、常に利用者の顔とはつながって手が回らないというまでではないと聞いたが、職員の方は動きっぱなしという感じであった。

初日、2日目は職員の方の動きを観察する余裕はなく、言われたことをする、利用者の方とお話をするくらいであった。しかし、利用者の方とお話をするのでも、自分を知ってもらえ、そして、相手を知ることができる。そうすることによって、人間関係、信頼関係が構築されるのだと思う。

まず私は、職員の方をはじめ、利用者の方の名前を覚えることを心掛けた。早く覚え、〇〇さんと呼ぶことで、安心感があると思う。逆の立場で考えても、すぐ名前を覚えてもらい、呼んでもらうことは嬉しい。大体のことは、自分がされて、言われてうれしいことは、相手に対してもうれしいことであると思う。

認知症の利用者の方が大半で、さっき話していたことも忘れてしまい、私と一緒に活動していた中国出身の友人が「中国から来た」と言うと、その時は「おおそうかね！」と驚いていたが、ちょっと時間が経つと、「あんたはどこ出身かね？」と聞かれたりする。初めは私たちも戸惑っていたが、職員の方の認知症の人に対する接し方を見て学んだ。それは、本当に普通の人と接する感じである。同じことを言われたとしても、それを当たり前の会話として答え、すーっと時間が流れるといったように思えた。これが、ここの日常なのだ、と思った。

初日の活動で、女性の利用者の方ばかりの中で男性の方は2人しかいなかった。このようなことを言ったら勘違いされるかもしれないが、肩身の狭い思いをしてそうな利用者の方もおられた。その男性利用者はあまり笑わない方であった。普通だったら、この人はあまり笑わない人なのだ、と思って終わりだったのだが、この時はこの人の笑った顔が見てみたい！と思ったのだ。その日から、その利用者の方が来られるたび、隣の席に行って話をしたり、昼食時も隣や、同じ机で食べて「おいしいですね」と言ったりと、時間が進む

につれて仲良くなっていった。うたの時間になると大きな声で歌っておられて、歌が好きなのだと知った。この時はまだ笑顔は見られていない。どうしたら笑ってくれるかと考えていたところ、気づいたのである。どう笑わそうではなく、自分が笑っていれば、自分が楽しくしていれば自然と周りも和み、笑顔になるのではないだろうか。それに気づくことができ、その男性利用者の方だけではなく、周りにいるほかの利用者の方々と繋がってお話をする事で、共通の話題も見つけることもあり、利用者の方だけでなく私自身も楽しい時間を過ごせた。

あかりは常滑市にあり、利用者の方も常滑地域のご近所さんという人が多く、お互いがお互いを心配、想いや楽しいことを共有しているようにみえた。この土地のことを教えてくれたり、私の出身地である岡山のことを説明したりで私も同じ時間を共有した。

この活動で一番思い出として印象に残っていることは、自分たちで企画運営したレクリエーションである。私たちは、風船バレーというレクリエーションを企画した。しかし、考えが甘すぎて、その場で何とかなる！という感じでやってしまった。2つのチームに分かれて座ってもらい、真ん中にネット代わりのひもを張って、風船をボールに見立ててバレーをした。その場その場だったため、ルールもあいまいで、利用者の方を混乱させてしまい、職員の方にメリハリをもってちゃんとルールを決めてやって、と言われた。そして何より、利用者の方から、「これじゃ皆にボールがいかないよ」「楽しくない」といわれてしまった。どうしようどうしよう何もできずにいると、数人の利用者の方から、こうしたほうがいいよ、ああしたほうがいいよ、と言ってくれたのだ。実際にプレーしている利用者の方がいわれているのだからその通りにやることにした。2列で向かい合っていた形ではなく、円になった。そして、打ち合いではなく皆で風船を落とさないように何回つないでいけるか、という全員で協力しあう形式になった。そうすると、一人ひとりが声を出して数をかぞえたり、「がんばれー」、「私がとるよ」とやっていた。認知症のあまり言葉を使わない利用者の方が、「あの人はルールを守っていない」と、ボソッとつぶやいていたのを聞くと、ルールを守っていない利用者の方に注意することより、ルールをちゃんと理解してくれていたことがうれしかった。

「困っていたらお互い様」を、身をもって実感したときであった。そして、自分たちが創っていくものは、しっかり考え、話し合い、準備をきちんとしていくことが大事である。自分自身も困るし、何より、利用者の方が一番困ってしまう。

あかりは、地域で人々をくっつける役目をしているのだと感じた。身体が悪くなれば外出も減り、それに伴って交流も減る。その状態を防ぐために、あかりをはじめNPO法人が多く知多半島にあるのだとも思う。

今回のサービスラーニングの活動では、ここでしか学べないことをたくさん学べた。そして、来年度の実習でも活かせることがたくさんあるであろう。そして、その実習でも学んだことが、また次へ次へと自分を成長させてくれるはずだ。